

私は将来小児科医を目指しているが、私の住む京都には理想とする小児科医の T 先生がいる。子育て中の親は口を揃えて「T 先生がいてくれはるから、安心して子育てができる。」という。

第 1 に T 先生はとても良き相談相手である。いつも穏やかに患者の話に耳を傾けてくれる。幼児がしどろもどろに話しても、親が慌てていても、話を遮ることなく辛抱強く聞いてくれる。口癖は「大丈夫やで。安心しい。」高熱の子どもが心配でしょうがない親たちが、T 先生のこの言葉に何度励まされたことか。

第 2 に T 先生は最新医療も含めて小児医療に関する知識が豊富だ。紫斑病や小児多系統炎症性症候群 (MIS-C) などの難病にかかり、T 先生の早期診断により救われたケースが沢山ある。T 先生は、診断が難しいときは患者の目の前で ipad で最新の医療情報や新薬の情報を確認し、最適な治療を探してくれる。患者の目前で医学辞典を調べる医師にはなかなか遭遇しないが、わからないことは調べる、という当然のことができる医師だ。また、T 先生は週 1 回小児血液学の専門医として K 大学病院で白血病やリンパ系悪性疾患などの小児難病治療にあたっておられるという。地域の最先端病院と個人の小児科病院で培った知識を相互に還元してくださっている。

第 3 に T 先生は、地域医療連携のスペシャリストだ。小児がんなら K 大学病院、心臓疾患なら N 病院、と地域の総合病院の専門領域を熟知されており、難病、重症患者を迅速に総合病院に繋ぐネットワークをもっておられる。前述の MIS-C 患者は T 病院で受診 1 時間後には川崎病の専門医のいる N 病院に入院し検査を開始したという。府内の病院は全て T 先生の傘下にあるのではないかと疑いたくなるほど連携が円滑だ。

T 先生は、まさに日本医師会が定義する「健康に関することをなんでも相談でき、最新の医療情報を熟知して、必要な時には専門医療機関を紹介してくれる、身近で頼りになる地域医療を担う総合的な能力を有する」かかりつけ医そのものである。

今後の日本の地域医療には T 先生のようなかかりつけ医を育てることが必須ではないかと思う。自分や家族が病気の時、誰も最先端総合病院で治療を受けたいと願うが、医師や病床は限られており、最先端医療の必要な人を選別するシステムが必要である。それをかかりつけ医が担うべきである。かかりつけ医には、コミュニケーション能力、最新医療も含む総合的な医学の知識と、適切な地域医療連携の仕組みが必須であるが、個人で最新医療の知識を収集し続けることと、連携ネットワークを確立するのは限界がある。そこで国や医師会は制度的に、定期的に最新医療情報を提供し、地域の医師が容易にアクセス可能な「どの病院に繋がればいいのか」がわかる連携システムを構築すべきである。T 先生のようなかかりつけ小児科医がどの地域にもいれば、日本中で安心して子育てが可能となるはずだ。

(参考文献)

- ・ 日本医師会・四病院団体協議会合同提言 (2013 年 8 月 8 日)